

## まえがき

著者	岩? 葉子
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
シリーズタイトル	研究双書
シリーズ番号	503
雑誌名	イラン国民経済のダイナミズム
ページ	i-ix
発行年	2000
出版者	日本貿易振興会アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00012479">http://hdl.handle.net/2344/00012479</a>

## まえがき

国民経済とは何か、という問いに答えることは恐らくさほど難しくない。少なくとも、今日世界中の紛争や大国の分裂がわれわれに問いかける、「民族」のアイデンティティーの所在や、帰属する「国民国家」の正当性に向けられた問いに答えるほどには、難しくないであろう。

本書では、いくつかの装置の共有をもって国民経済を定義する。すなわち国民経済とは、ある国境線の内側に暮らす人々が、貨幣・財政・金融などに関する（そのときどきに採用・施行される経済諸政策も含んだ）同一の経済諸制度の下に運営している経済それ自体を指し、そうした制度・政策の適用範囲の政治的正当性や妥当性は、ここにおいて問われるべきものではない。国民経済は、制度的な現実の一部にすぎないのである。

しかしながらこの現実には、圧倒的な力をもって人々の日常を支配している。現代にあっては、どのような出自で、どのような言語を話し、どのようなアイデンティティーをもとうとも、彼・彼女の日々の生活は、およそ上記の経済諸制度の効力の及ばない場所では営まれ得ない。

もちろん人々は制度のあり方を問うことができる。例えば不平等な税制、政府財源の不適切な分配などには異議を唱えることが可能である。ある「国家」の経済諸制度は多くの解決すべき問題をかかえ得るからだ。しかしなお、それらはその施行下に暮らしている人々に、同じシステムのなかで生活しているというひとつのまとまりを与えている。経済諸制度はその意味で、人為的な集団としての「国民」に対する直接的な統合の仕組みのひとつである。

一方、人々の経済生活はひとり「国家」の定めるものだけにのみ規定されるの

ではない。そこには個々の人間の自発的な経済行動がある。構成員たちの無数の判断や計算の累積が社会のルールを作り、慣習を形成する(それらはいわゆるインフォーマル・セクターにすらいっそうははっきりと見出される)。国民経済は「国家」によって選択される狭義の経済諸制度と、人々の社会的な経済行動パターンとが生み出す総体としての制度なのである。

これまで、イランという国のアイデンティティーを探ろうとする試みは、さまざまな角度から行われている。現在のイラン国境線内に相当する広大な地域が共有する歴史的記憶や、政治イデオロギーの潮流、言語の連なり、文化、宗教などを手がかりに、イランという国をとらえ直そうとするものである。そのなかにはもちろん多くの重なり合いと、そこからはみ出す部分とが交錯している。多くの来訪者は、イランにおけるその多様な自然と民族、彼らの文化を目の当たりにする一方で、それらがひとつに包摂される場あるいは一体性のようなものを体感して、驚きを覚えることだろう。

本書は、イランに特定の一体性を与えているものが何か、という問いに対するひとつの答えを提示するために、前述のような国民経済の制度的現実注目するものである。イランを現存のイランたらしめているひとつの装置としての国民経済を具体的に抽出することによって、かかる一体性の根源は何かを考えようとするものである。

経済諸制度が人々の生活に及ぼす影響を否定する研究者は恐らくいないだろうが、これまでの現代イラン研究が主としてその宗教、政治イデオロギー、国際関係などの分野に蓄積されてきたために、イラン経済の様態を具体的に問うた研究は多くはない。しかし上記のような既存の研究分野の外で、方法的な意味での新たな試みが生まれつつある。以下に、そうした試みの一端として最近10年ほどの間に著されたイラン経済研究をいくつかの範疇に分けて示そう。

現代イランの経済を考察する上で常に最も注目されてきたのは、言うまで

もなくその「石油産出国」としての経済諸制度のあり方である。石油経済について論じられる場合には一般に効率的な資源配分の問題がクローズアップされるが、イランの場合にはKarshenas (1990) やMadani (1991) が工業化戦略の問題を、Behdad (1989) が都市化や所得格差の問題を取りあげて論じている。

イスラム革命後のイランの経済政策全般についての議論もある。革命後のイラン経済を包括的に紹介、論じたものとしてはEftekhari & Torkamani (1992) やAmuzegar (1993) が挙げられる。また、Pesaran (1995) は5カ年計画の実施と金融部門を中心とするマクロ経済のパフォーマンスの関連を分析し、Amirahmadi (1996) やMazarei (1996) は為替政策や銀行システムについての個別の経済政策を、石油収入を財源とした政府介入型の金融システムの特徴やその弊害に着目して論じている。

またこの他に、対イラク戦争の停戦後復興を含めた経済再建のための長期的経済政策について、一時期さかんに議論が行われた。

こうしたマクロ経済分析とは別に、経済部門別の専攻研究も著されている。最もさかんな部門としては農業部門があるが、農地利用や農業生産技術の問題を取りあげたMoghadam (1996) や原 (1997) などを挙げることができよう。また製造業部門では繊維企業の商取引慣行を扱った岩崎 (1997) の研究がある。

もちろん、イラン経済の具体像を模索するこれらの試みがいまだ充分でなく、残された課題がきわめて多いことは言うまでもない。ここで先行研究において取りこぼされてきた点を同時に指摘しておきたい。第1には、革命後のイランでの調査活動の難しさに起因するが、ミクロレベルでの実証的研究の圧倒的な少なさという点を挙げることができよう。イラン国外で入手できる限られた統計資料等を使ってのマクロ経済分析はある程度なされてきたものの、現地の人々の生々しい生活の様子がそれらからはくみ取りにくかった。第2には、1点目と関連しているが、イランの民間部門の動きが見えにくか

った点である。もともと産油国における政府の役割は絶大であるが、革命後さらに、政府による大企業の国有化政策や保護主義的貿易政策などによってこうした傾向に拍車がかかった。主たる生産力が国有化され政府主導型の経済政策が重視されたことで、イランにおける民間部門のダイナミズムは霞んでしまった。しかし革命後のイランに民間部門が存在しなかったわけではもちろんない。革命後のイランには石油収入に支えられた巨大な国民経済の枠組みと、新たな体制のなかで模索する市井の人々の生活の両者が常に存在してきた。従来の研究には、こうした一般の人々の経済生活についての像を膨らませにくい、という限界があったと言えよう。

本書では、政府の経済諸政策に規定される枠組み全体をふまえ、さらにいくつかの個々の事例を分析することによって、これまでのイラン経済研究に欠けていた点を少しでも補いたい。読者は本書のいくつかの事例から、石油に依存するイランの財政構造やそのなかで運営されるさまざまな経済諸政策を確認すると同時に、そうした枠組みの下で時にはそれらの恩恵を享受し、時にはそれらに拘束を受けながらも自身の生活を構築しようとする人々の姿をも見い出すであろう。

本書の構成は以下のとおりである。第1章は、イランにおける国民経済の形成が歴史的にどのような経緯を経て行われたかという問題を取り扱う。後藤は、国民経済成立については、国民的市場の形成をもってこれを確認することができる旨を指摘し、その準備期間としてきわめて重要な時期である1920年代から30年代にかけての大戦間期に注目する。ことにこの時期、地主制度の強化が国家の資本蓄積にどのような役割を果たしたかを論じることを通じて、従来、国家の政治的支配システムの一翼として論じられることが多かったイランの地主層の経済的な役割に注目している。

第2章以降は革命後を中心とする現代イランの国民経済のあり方を各分野から切り取っていく。第2章において、カールシェナースは革命後のイランの経済パフォーマンスを概観している。カールシェナース自身はこれまでに

イランの石油経済における工業化の阻害要因などについての分析を発表してきたが、本書では特に、これまでの自身の議論を簡潔にまとめる形をとりつつ、イスラム革命後に導入されたさまざまな経済諸制度とその運営の実態が民間部門を含むイラン経済にどのような影響を与えてきたかを、独自の視点から分析している。

第3章では、岩崎が製造業部門の流通機構に焦点をあて、現代イランの民間部門における生産組織および関連の流通諸制度を分析する。政府の介入・規制力の相対的に小さいアパレル産業では、民間の生産者と流通業者が独自のシステムのなかで製品の流通経路を確立している。流通資本の影響力が甚大であることがつとに強調されてきたイランだが、他のアジアの国々との現象的な共通項をもつ生産者と流通業者との関係には、ある種の普遍的経済合理性を見い出すことも可能だと指摘されている。

第4章では、地域の経済発展の肯綮としての工業に注目した吉田が、ヤズド州の事例を分析している。吉田は、古くより繊維製品の産地として知られた同州において今日的な発展がどのような形で表われているのか、という点に関心を寄せている。ヤズドの地理的特性や産業の歴史的発展経過の叙述から、イラン地方都市のひとつの類型を探ることが可能である。また首都テヘランとの関係において、イランの地方経済がどのような局面にあるかを考察する材料を提示している。

第5章では、原が20余年にわたる農村フィールドワークの成果をもとに、現代イラン農業の直面する問題を、農業政策とのかかわりから考察している。革命以前は農村部開発に農業公社が大きな影響力をもったが、革命後は農村復興聖戦隊がその主軸となっていく。革命後の農村で議論の大きな焦点となった土地分配問題の経緯が解説されるほか、現政権が直面する人口・食糧問題、自然生態系の保護の問題などが指摘されている。

補章では、ソレイマニエがイランの絨毯産業の現状を報告する。革命前後を通じて、イランの主要な外貨収入源のひとつとなってきたペルシア絨毯の伝統的生産システム、またいまなおそうした諸工程を経て産出されている様

子が具体的に語られる。革命後、政府の指導の下に統合されてきた絨毯生産者の諸組織などについても示されている。現実の「国家」と民間の生産主体との間に構築されている密接な関係は改めて国民経済の制度的影響力を考える上で貴重な情報を提供していると言えよう。

本書はアジア経済研究所において1998年度に行われた「イラン国民経済のダイナミズム」研究会の成果である。研究会の発足に先立ち、97年から私的な準備研究会が始められ、正規のメンバーの他に、イラン経済に関心をもつ学生諸氏の広範な参加も得られた。ご協力をいただいた方々に、ここであらためて感謝の意を表したい。また研究会の趣旨をご理解いただき、寄稿を快諾くださったロンドン大学のカールシェナース氏にも、謝辞を申し述べたい。

最後に、執筆にあたっては、イランの国民経済の枠組みを前提とした経済諸活動に着目するという点を除き、各執筆者に対して特に方法論的要件を課していないことを言い添えておく。それぞれの読者が、各執筆者の異なるアプローチの中に新たな「イラン像」を発見していただければ幸いである。

1999年10月

岩崎葉子

## 〈参考文献〉

## 〈邦語文献〉

- 原 隆一 [1997] 『イランの水と社会』 古今書院。  
 岩崎葉子 [1997] 「イラン繊維産業におけるナマーヤンデの役割」 (『アジア経済』第38巻第2号, アジア経済研究所)。

## 〈外国語文献〉

- Amirahmadi, H. [1996], *Iran's Development: Evaluation and Challenges*, *Third World Quarterly*, Vol.17, No.1, pp.123-147.  
 Amuzegar, J. [1993], *Iran's Economy under the Islamic Republic*, London: I. B. Tauris & Co. Ltd.  
 Behdad, S. [1989], *Winners and Losers of the Iranian Revolution: A Study in Income Distribution*, *International Journal of Middle East Studies*, No.21, pp.327-358.  
 Eftekhāri, A. & Torkamāni, A. [1992], *Eqtesād-e Īrān*, n.p. Mo'assese-ye Motāle'āt o Pazūheshhā-ye Bāzargāni.  
 Karshenas, M. [1990], *Oil, State and Industrialization in Iran*, Cambridge: Cambridge University Press.  
 Madani, A. [1991], *Estrātezihā-ye Touse'e-ye Eqtesādi*, Tehrān: Sherkat-e Bāvar-dārān.  
 Mazarei, A.Jr. [1996], *The Iranian Economy under the Islamic Republic: Institutional Change and Macroeconomic Performance (1979-1990)*, *Cambridge Journal of Economics*, Vol.20, No.3, pp.289-314.  
 Moghadam, F. [1996], *From Land Reform to Revolution: the Political Economy of Agricultural Development in Iran 1962-1979*, London: I. B. Tauris Publishers.  
 Pesaran, H. [1995], *Planning and Macroeconomics Stabilization in Iran*, Cairo: Economic Research Forum for the Arab Countries, Iran & Turkey.  
 Schirazi, A. [1993], *Islamic Development Policy: the Agrarian Question in Iran* (translated by Ziess-Lawrence, P.J), Boulder: Lynne Rienner Publishers.